

インフラの町医者

全9回の9
をめぐって
第8回建設トップランナーフォーラムより

建設トップランナーフォーラムの最後に行われたパネルディスカッションでは、地域防災を担うべき建設業者の使命、公共事業の効果を実現する必要性、新分野に進出する中で

の雇用確保の意義などが語られた。パネラーは、岐阜県知事の古田肇氏、国土技術研究センター国土政策研究所長の大石久和氏、愛電社長の西山周氏、日本青年会議所建設部会長の田井慶一郎氏の4人。コーディネーターは建設トップランナー倶楽部代表幹事で慶応義塾大学特任教授の米田雅子氏が務めた。

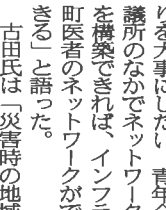
議論は、なぜ地域建設業者が「町医者」を目指すのか、名付け親の西山氏の説明から始まった。西山氏は地域を理解し、住民と顔見知りであり、使命感と情熱を持っているイ



西山周氏

地域防災は建設業の使命

メーシから名付けたと説明。これらがなければ「防災につながる」と述べた。大石氏は、日本が小さな集落という単位で防災を行ってきた民族であることを示し、「地域の防災は地域の人があるべき」と指摘。西山氏は「地域を守ることはわれわれの使命」と応じ



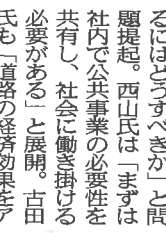
田井氏も「横のつながりを大事にしたい。青年会議所のなかでネットワークを構築できれば、インフラ町医者のネットワークができる」と語った。

建設業の初動対応には感心する。県が対策本部を設置する前から最前線で活動している」と述べ、こうした



古田肇氏

「地方のインフラ維持」で鍵を握るのは地方自治体だが、大石氏は「市町村は人員削減でインハウスエンジニアが減っている。地域の建設企業が町医者として腕を磨いてほしい」と訴えた。



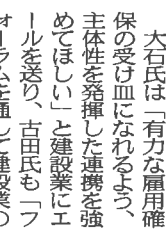
米田雅子氏

「地域に必要な建設業になるにはどうすべきか」と問題提起。西山氏は「まずは社内での公共事業の必要性を共有し、社会に働き掛ける必要がある」と展開。古田氏も「道路の経済効果を実現するべき」と述べた。



田井氏

建設業の「複業化」について米田氏は「地域のニーズに向けて複業する必要がある」と提案。西山氏は「ただ多角化するのではなく、いかに独立した事業



大石氏は「有為な雇用確保の受け皿になれるよう、主体性を発揮した連携を強めてほしい」と建設業にエールを送り、古田氏も「フォーラムを通して建設業の

「雇用を生み出し守ること」は、地域にとって最大の社会貢献だと述べた。田井氏も「複業」をキーワードにした新たな建設業を模索したい。インフラ町医者が浸透するよう、地域で生き残る仕組みを構築

雇用守ることが社会貢献

として「多柱化」し、雇用底力を感じた。地域の町医者と一緒にインフラを守っていききたい」と締めくくった。会場を埋め尽くしていた来場者は、熱のこもった議論を展開した。パネラーに大きな拍手を送った。

「地方建設記者の会」取材班は、神田浩司(北海道建設新聞社・北海道)、折目暢巳(日刊岩手建設工業新聞社・岩手県)、栗谷卓臣(秋田建設工業新聞社・秋田県)、高橋量太(建設新聞社・宮城県)、相澤隆(福島建設工業新聞社・福島県)、小林務(新建新聞社・長野県)、市成純(日本工業経済新聞社・東京都)、上月研二(日刊建設工業新聞・鳥取県)、中園昌志(大分建設新聞社・大分県)、鹿嶋洋之・山口大吾(建設新聞社・長崎県)、田原謙一(鹿児島建設新聞・鹿児島県)、澤田久仁昭(建通新聞社・東京都)。(敬称略)